

別記様式第4号

博士論文の要旨及び審査結果の要旨

氏 名	片桐 彩
学 位	博 士 (教育学)
学位記番号	新大院博 (教) 第28号
学位授与の日付	令和 3年 9月 21日
学位授与の要件	学位規則第3条第3項該当
博士論文名	高等学校における協働学習に基づいた映像メディア表現の教育的効果に関する研究
論文審査委員	主 査 教 授 柳沼 宏寿 副 査 教 授 佐藤 哲夫 副 査 准教授 田中 咲子

博士論文の要旨

本論文は、他者との関わりや相互作用を伴う映像メディア表現の教育的効果に関して、生徒の学習行動や社会的行動、人間形成に及ぼす影響の観点から明確にするとともに、高等学校の現場における授業実践の教育的効果を検証することを目的とする。そのために、教育心理学における動機づけ理論や心理統計の方法を採用し、複数の高校において授業実践と質問紙調査による量的研究を行なうとともに美学・美術教育学的な視点からの質的検討を展開している。

本論文は、以下のとおり構成されている。

まず全体は3部構成となっており、第I部（序章～第2章）が心理学的な検討を主とした理論編、第II部（第3章～第5章）は高校での授業実践を試みた実践編、第III部（終章）が総括的考察である。

第I部

序章では、本研究の論点について、1) 協働によるモバイルムービーの本質はデジタルメディアの機能によるものであること。2) 美術の協働学習とは、個性を生かしながら全員がよりよい学習成果をめざすものであること。3) 映像メディアによる表現をもとに「学びに向かう力」「人間形成」との関係を議論すること。の三つに捉えている。

第1章では、高校生を対象として実験授業「学校CMプロジェクト」を実践し、並行して質問紙調査を行った結果をもとに、協働による創造活動の学習効果尺度を22項目に渡って構成するとともに、モバイルムービーの学習に対する生徒の認知・考え方の傾向が、「協働による内発的な学び」「他者からの触発による創造活動の促進」「他者理解」「個人思考」の4つの因子によって規定されることを実証した。また、協働による内発的な学び・他者からの触発による創造

#### 別記様式第4号

活動の促進・他者理解は、学習に対するポジティブな認知であり、学習意欲と正の相関関係にある一方、個人志向は学習に対するネガティブな認知であり、学習意欲には結びつかないことが示された。

第2章では、生徒の学習行動、社会的行動、自己肯定感と協働によるモバイルムービーとの関係を検討している。まず、社会情動的スキル（OECD）の下位概念とされる目標の達成、他者との協働、感情のコントロールに注目し、これらの3要素を心理学における構成概念（達成目標、社会的目標、自己肯定感）と重ねながら「美術における協働スキル」という仮説モデルを作成した。因子分析の結果、マスタリー目標、パフォーマンス目標、向社会的目標、規範遵守目標、自己表現力、自己閉鎖性・人間不信、被評価意識・対人緊張、自己実現的態度、充実感の各下位尺度を、生徒の学習の成功感に関わる因子として見出した。次に、それらの各因子と第1章において協働によるモバイルムービーの教育的効果として規定した4つの因子との相関分析の結果、生徒にマスタリー目標を認知させ、向社会性、規範遵守性、自己表現力を培い、充実感を味わわせるような指導を行うことが生徒の学習の成功に有効であることを実証した。さらに、個人志向に関して、効果的な学習には結びつきにくく、仲間が困っていても手を差し伸べようという気持ちが起こりにくいという傾向や、仲間との意見交換などの際に、相手の意見も尊重しながら自分の意見を述べるような、やや高度なコミュニケーションに苦手意識を持ちやすいという詳細な傾向をデータから読み取った。

#### 第II部

第3章からは、前章までの研究の結果を受けて多様性のある生徒集団を対象とした応用研究を行っている。本章では、授業実践のための予備調査として、定時制高校（C高校）における協働学習に基づいた映像メディア表現の指導方法に関して検討した。予備題材への取り組み状況と質問紙調査の結果から、映像メディア表現の実践に関して、1) 個々の生徒が取り組みやすいよう個人制作をベースとした課題及び協働学習の推進、2) 生徒個々の特性が学習集団の中でうまく生かされるような支援方法の工夫、という二つの指導方針が得られた。

第4章では、前章で得られた授業方針に基づいて、C高校とアメリカのJ高校との協働授業「(SK & JM) 文化交流プロジェクト」について、事前・事後計2回の質問紙調査を実施して本題材の教育的効果を測定した。調査の結果、生徒は全体として、個人の努力や習熟に価値を置くマスタリー目標指向性を向上させていたことから、学習に対する不安を抱えやすいC高校の生徒にとって、個人制作をベースにした協働学習という方針が効果的であることを実証した。また、国際交流を通して、生徒に現実世界に注目させ、現実と自己との関係を映像によって再構成させることは、生徒の自己意識にも影響を及ぼすことが示唆された。

第5章では、本研究によって得られた知見と関連させ、画像による表現としてのモバイルフォトグラフィーを試み、その可能性に関して探索的に検討している。生徒の表現や活動を検討した結果、モバイルフォトグラフィーは、「見る」「撮る」「編集する」という一連の流れによる表現として捉えることができ、表現の過程に自己表現や芸術表現としての可能性を十分に秘めたジャンルであることが示された。

#### 第III部

終章では、研究全体を振り返りながら、協働学習に基づいた映像メディア表現が有意義な教育的効果をもたらすことが質的・量的検討によって明らかになったと結論づけている。また、今後の成果として、美術教育の学習指導上の問題や多様な実態に即応する指導方法などを挙げている。

### 審査結果の要旨

本論文「高等学校における協働学習に基づいた映像メディア表現の教育的効果に関する研究」は、メディア時代とも言われる今日、映像メディアを自己表現のツールとして扱うスキルとして、また、メディア・リテラシーとの関連において現代的意義を有する研究である。とりわけ「協働学習」の観点からのアプローチは、これから多様化する社会に求められる資質を育成するものとして重要である。美術教育の研究として、映像メディアによる表現は未だ実践や研究が成熟しているとは言い難い。そのような中で、論者は、その教育的意義を捉えながら実践し、海外の研究者とも連携を継続しているのは注目される。また、「映像メディアによる表現」と「協働」との関連に着目した点、および、それを複数の高校で実際に実践・調査し、心理学的に踏み込んだ量的検討によって分析している研究は、美術教育学的には稀有名なもので非常に高く評価される。(早稲田大学人間文化研究科(富永・藤城・保崎)の研究(2019)に、本論文の第2章を構成する論文「高等学校における協働学習に基づいた映像メディア表現の教育的効果(1)」『美術教育学』が引用されている。)

一方で、美術教育の研究として見た場合、映像メディア表現と美術の関連性についての考察や分析が十分とは言い難い。マノヴィッチ・北澤・ベンヤミンなどを参考しながら、デジタルメディアとしてのインタラクティビティやアウラ的考察を展開してはいるが、メディア論と教科としての美術との関連性が見えにくく、高校での実践や分析においても同様の難点を捉えることができる。しかし、本論の目的から言えば、この点は本論文の学術的価値を損なうものでは無く、「協働による映像メディア表現」の教育的効果を心理学的に解明した点は、美術教育学としてもこれからの先導的な研究として高く評価できる。

なお、本論文は映像メディア表現を美術教育の立場から実践と理論的考察を行なったものであり、学位は「教育学」とするのがふさわしい。

以上の審査結果から、本論文審査委員会は、全会一致で、本論文が博士論文としての水準に達しており、博士(教育学)の学位を授与するに値するものと判断した。